教職課程広報誌

総合教職実践センターだより

第２号　　発行日　２０２６年３月２４日

巻頭言

現代社会において教員になるということ

総合教職実践センター　副センター長　齋藤一晴

私が 20 歳だった 1995 年の 3 月 16 日、衆議院外務委員会において、日本の戦争責任について意見を求められた高市早苗は、以下のように発言している。「少なくとも私自身は、当事者とは言えない世代ですから、反省なんかしておりませんし、反省を求められるいわれもないと思っております」。

当時、大学 2 年生だった私は、彼女の発言が強く印象に残った。なぜなら、私も戦争を経験していない世代だが、日本の戦争責任に対して反省をする必要があるのか、それとも無いのか、といったことについて自分自身に知識も考えも無かったことに気がついたからである。私は自身の無知を前に戦争被害者個人の生の声を聴きたいと考え、翌年から 2 年間の中国留学を決めた。その後、中国だけでなく世界中の戦争被害者個人の尊厳回復の必要性を感じた私は、過去に学び、みずからの意見を生み出すことなしに現代社会に向き合うことはできない、という今日まで続く研究テーマにたどり着くことになった。

上述したような経験から 30 年が経過したことになる。私が専門とする歴史学や歴史教育の研究は、この間、大きく深まり、そして蓄積され、日々、成果が更新されている。ところが、歴史教科書に日本の戦争責任や戦後責任、植民地支配責任に関わる記述は研究成果と比例して飛躍的に充実したものになったかといえば必ずしもそうではないように思う。例えば、日本軍「慰安婦」は、1997 年に刊行されたすべての中学校社会・歴史的分野に掲載されていた。ところが、現在は、学び舎が刊行している『ともに学ぶ人間の歴史』の 1 社だけである。なぜ文部科学省は子どもたちに学ぶ機会を保障しないのだろうか。彼らにとって子どもたちは無知で、何も考えられない存在なのだろうか。

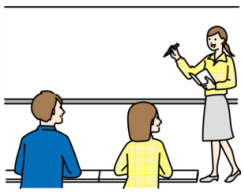
政治に目を向ければ高市早苗が憲政史上初の女性首相となり、そのもとで行われた衆議院選挙では、自由民主党が過去最多の議席数を獲得することになった。私は自身の研究や教育活動、そして歴史学や歴史教育が積み重ねてきたものが何であったのか問われているように感じた。言い換えれば、子どもたちに届いてきたのかと。

彼女の昨今の発言を見聞きする限り、30 年前の歴史認識から変化は無いようである。過去に学ぶ姿勢を示さない者がトップに立った現代社会において、教員になるということはどのような意味を持っているだろうか。まして 30 年前と比べて国内外を問わず「力」がすべて、「声」の大きい者が勝ちという考え方が強まっているように思う。この原稿を書いているときも、高市は憲法改正への意気込みを語り、アメリカはイランへの軍事行動を示唆するなど現代社会は緊迫している。

かつて歴史学者の家永三郎は、みずからの人生を振り返り、日本の戦争や植民地支配に対して「傍観者」であったことを認め、それを悔いる思いから戦後、日本の民主主義や歴史学の発展にこだわりをもってきたと述べている。私なりに解釈すれば、戦時中、教員が教え子を戦地に送り出した歴史を繰り返してはならない、という信念であり、見て見ぬふりをせずに主体的に生きることの大切さである。

過去の歴史に「反省を求められるいわれもない」と思考を停止してきた者からは、家永が語ったような主体的に生きる姿勢は感じられない。今こそ歴史学や歴史教育だけでなく、研究と教育活動の成果と課題が問われているといえないだろうか。子どもたちが主体的に生きるために、教員は何ができるだろうか。それを考えるのが大学で学び、教職課程にたずさわる私たちの責任であるように思う。

子どもたちは何も考えていないのではない。見て見ぬふりをしているのは子どもではなく、大人なのだと強く自覚することが、教員にはとりわけ求められていると私は考える。



教採スタートアップ講座に参加して

教育・心理学部　学校教育学科２年　A.N

〇参加しようと思った動機

私が本講座に参加したきっかけは、教員採用試験を 3 年生で受験できるということを授業中に聞き、挑戦したいと考えたからです。3 年生受験に向けて、早期からの準備が必要であると考えていましたが、実際に準備するとなると何から始めて良いのか分からないことが現状でした。そこで本講座に参加することで、受験準備として何が必要であるか分かるのではないかと思い参加を決めました。

〇参加して感じたこと

本講座受講前には、自分自身が教員採用試験を受けるという実感を持つことができていませんでした。自分事ではなく、何か遠くにある他人事とのように感じていました。しかし、本講座で、教員採用試験の受験方法や、受験学年での様々な違い、各種試験方法の説明や CDP 講座を含む学内支援ツールの紹介などを通して、自分事として考えることができました。教員採用試験についての内容を知らない状態での受講であったため、聞く話が全て新鮮であり、今後の自分自身のステップについて理解することができました。そのような思考の変化が本講座受講の 1 番の成果でした。

そのような中で、試験が現実味を帯びていき、この春休みから地道に問題集を解くなどの勉強を始め、早期からの受験勉強へのモチベーションに繋げることができています。本講座を受けていなければ、春休みは対策や調べることもせずに過ごしていたと思います。本講座を受けたからこそ、受験希望自治体の教員採用試験情報や各種勉強を現段階から進めることができております。そのような部分に関しても、本講座を受講した意義があると感じております。

〇教採に向けての意気込み

私は、特別支援学校の教員を第 1 志望にしています。まずは 1 次試験に向けて一般教養や教職教養などの問題集から学習を始めております。また、3 月には教職実践センターの内田先生のミニ講座の参加も予定しております。現在進めている受験勉強や、今後の受験勉強などについて、経験豊富な内田先生よりアドバイスを受け、3 年生受験で合格できるように精進していきたいと考えております。

また、第 1 志望だけでなく、第 2 志望では他県の小学校を受験しようと考えております。その理由として、「通常の小学校にこそ特別支援教育の知識を持った教員が必要である」という、本大学のオープンキャンパスに参加した際に、現在県内の小学校で勤務されている先輩からおっしゃっていただいた言葉が心に残っていることがあります。

第 1 志望である特別支援教育だけでなく、教員採用試験対策をしていく中で、様々な視点を拡げていき、知識だけでなく、人間的にも成長できるようにしていきたいと考えております。そのように勉強を積み重ね、幼い頃から夢見ていた特別支援学校教員になりたいと思います。

合格体験報告会に参加して

国際福祉開発学部　国際福祉開発学科３年 M.M

１．参加してよかった点

実際に教員採用試験に合格した先輩方の体験談を直接聞くことで、試験対策の具体的なイメージを持つことができた点が良かった。勉強方法やスケジュール管理、面接対策など、実体験に基づく話は説得力があり、自分の準備不足や今後取り組むべき課題にも気づくことができ、有意義な時間となった。

２．得られたこと

特に印象に残ったのは、早い段階から自己分析や模擬面接に取り組むことの重要性である。日々の積み重ねが自信につながるという話から、継続的な努力の必要性を再認識した。また、不安を抱えながらも前向きに挑戦し続ける姿勢が大切だと学び、自分自身も主体的に準備を進めていこうという意欲が高まった。

３．参加して感じたこと

参加し、実際に合格を果たした先輩方の具体的な取り組みを直接聞くことができたことは、非常に有意義な機会であった。どの時期から本格的に勉強を開始したのか、どの自治体を受験し、どの校種を志望したのかといった詳細な体験談は、自分自身の今後の見通しを立てる上で大いに参考になった。また、筆記試験対策だけでなく、面接への備えなど、多角的な準備の重要性を実感した。さらに、他キャンパスの教職履修学生の受験状況や合格実績についても知ることができ、自身の現在地を客観的に見つめ直すきっかけとなった。

４．今後の教採に向けて

今後の教員採用試験に向けては、先輩方から繰り返し示された「早期からの計画的な学習」の重要性を強く意識していきたい。まずは過去問題に継続的に取り組み、出題傾向を把握するとともに、自らの弱点を明確にして補強していく必要があると考える。日々の積み重ねを大切にしながら、着実に力を伸ばし、最終的には自分自身も合格を勝ち取りたいと決意している。

教員採用試験合格体験報告会に参加して

教育・心理学部　子ども発達学科　学校教育専修３年　K.W

①　体験報告会に参加しようとした動機

私が体験報告会に参加しようと考えた最も大きな動機は、教員採用試験に関して様々な不安があったからである。今の自分の状況が分からなかったり、自分が志望している自治体に行きたい理由に不安があったりしたからである。また、どのくらいから勉強を始めたのか、どのような二次試験で問題が出たのかなど、試験に対して疑問が多く残っていた。

さらに、教員採用試験を受けた人の生の声を聴くことができる機会はなかなかないため、この機会に聞こうと考えたため、参加した。

②　当日参加してみての感想

教員採用試験に対して、どのような気持ちで挑んだのか、どのような勉強をしたのか、なぜその自治体を選んだのかなど、先輩の生の声を聴くことができてかなり貴重な機会となった。そのため、勉強方法や試験内容に関す疑問がかなり無くなった。特に、私は静岡出身ということもあり、静岡市の教員採用試験を受けようか悩んでいた。しかし静岡市の教員採用試験の時期がかなり早いということもあり、不安があったが実際に受けた先輩から過去問をもらったりできたので、少し不安がなくなった。

報告会の後半、先輩に自治体ごとに分かれて先輩に話を聞く時間があり、自分に合った話を聞くことができた。また、私は、CDP の教員採用試験対策講座に申し込んで、参加しているため、それに関しての話を聞くことができた。モチベーションの維持や勉強をするときのポイントを押さえることができるということが分かった。

③　今後に向けての抱負

私は今、第一志望の横浜の特別支援教諭の採用試験を受けようと考えている。そのため、CDP の教員採用試験対策講座を受講したり、バイト先までの電車の中でテキストを開いたりなど、いまできることを考えて試している。自宅で勉強するとスマートフォンやテレビなどの誘惑に負けて集中力が途切れてしまうことが多いため、勉強をやらざるを得ない環境を作ることで勉強をするようにしている。横浜以外にも静岡など、様々な自治体を受けようと考えているが、いまは横浜の教員採用試験に合格できるように CDP の講座で抑えたところから少しずつ勉強を始めている。

合格体験記（愛知県・小学校）

教育・心理学部　子ども発達学科　学校教育専修４年　A.H

①　勉強方法について

受験勉強を本格的に始めたのは、CDP 講座が始まってからである。それまでは勉強の方法が私の中でも曖昧だったため、教職センターの CDP 講座を受けながら、要点を押さえて勉強した。傾向を知ってから勉強することで効率よく勉強することができることから、一般教養も教職教養も一度過去問を解いてから勉強に入ることが大事であると感じる。愛知県の傾向を知ってからは以下の方法で勉強した。

一般教養は、大学受験の共通テストで勉強していた内容と近いものがあったので、主に思い出すことを中心に演習問題を解いていた。その中でも、社会は苦手意識があったため、一番早く取りかかり、歴史などの時系列を頭の中で整理しながらルーズリーフにまとめて覚えるようにしていた。また、文学作品や短歌などのことばは、一気に覚えるのが苦手なため、過去問に出てきたものは絶対に覚えると決めて、そこから少しずつ覚えるようにした。

教職教養は、大学に入ってから学んだ知識から CDP 講座の中で初めて知ったことまでさまざまで、初めは何から勉強したら良いかが分からなかったが、講座の中で取り扱った分野ごとに要点を整理して、繰り返し覚えることを意識した。私のやり方としては、講座で要点を聞く（ルーズリーフに書き写し）→要点理解（赤）の優先順位の高いページから赤シートで重要語句を隠しながらひたすら覚える→ある程度覚えてきたら実践問題集（緑）の過去問を繰り返し解く→間違えたところは要点理解（赤）に戻って確認し、間違えた問題をルーズリーフにまとめる→間違えた問題を定着するまで期間を空けながら赤シートで隠しながら繰り返し解く、という流れで分野ごとに分けながら勉強した。

②　後輩へのメッセージ

試験を受けて、面接の大切さを一番感じたので、一次試験の勉強を進めながら少しずつ面接の対策も始めておくといいと思います。普段の友だちとの会話の中で、場面指導などに関わる話をしておくと、自然とその場で考える力がつきます。面接の内容は事前に考えておくことも大切ですが、文章を丸暗記しようとすると、どうしても型にはまった硬い言い方になってしまいます。私は、文章を覚えるのではなく、質問の内容に対して話したいキーワードを整理するだけにして、その場で自分の思いを話せるようにすることや表情や雰囲気を柔らかくして話すことを意識して練習していました。一緒に働きたいと思ってもらえるような面接をすることが大事だと思います。過去問や大学の先生との練習の中でさまざまな質問内容に触れて緊張感のある中でも臨機応変に話せるようになるまで練習しておくと、自信につながると思うので、自分らしさを大切に頑張ってください。応援しています。

合格体験記（名古屋市・特別支援学校）

教育・心理学部　子ども発達学科　学校教育専修４年　C.T

受験対策・勉強法について

私は、一次試験の受験勉強を３年生の１月から始めました。一般教養と教職教養の勉強で主に使用したテキストは、時事通信の「要点理解」と「演習問題」、協同出版の「名古屋市の過去問」、資格の大原の「教職教養実践問題集」です。名古屋市は、一般教養と教職教養の中で分かりやすく特定の分野の出題傾向があったため、出題傾向のある分野に重点を置いて、その分野の問題を繰り返し解くようにしました。特別支援教育の勉強で主に使用したテキストは、協同出版の「全国まるごと過去問題集」と「名古屋市の過去問」、時事通信の「完全攻略」です。全国まるごと過去問題集は、分野ごとに章立てされてさまざまな自治体の過去問が載せられており、同じような内容の問題が続けて出題されるため、その章を解き進める中で自然と覚えることができました。

私が勉強のモチベーションを維持するためにしてよかったことは、勉強時間を記録するアプリを使ったことです。アプリによって勉強時間が可視化されるため、毎日目標を設定しながら、その目標に向けて頑張ろうという気持ちを持つことができました。また、このアプリは友人の勉強状況も把握できたため､友人の勉強状況をリアルタイムで見ることで、自分も勉強を頑張ろう、と意欲を持つことにもつながりました。

二次試験の個人面接と場面指導は、内田先生や竹脇先生にご指導していただいたり、友人同士で話す練習をしたりすることで対策を行いました。私自身、面接で話すことが苦手だと感じていたので、自分の考えを言葉にする回数を重ねることを意識しました。回数を重ねることによって、想定していなかった質問でも、練習した際の似ている質問の答えと結びつけて答えることができたため、繰り返し練習することは大切だと考えます。

後輩へ伝えておきたいこと

私は教員採用試験の受験を通して、積み重ねることの大切さと、周りの人と切磋琢磨することの大切さを学びました。勉強のし始めはなかなか覚えられず、不安もあると思いますが、積み重ねていくことによって徐々に解ける問題が増えていくと思います。また、教員採用試験を受験する人は多いと思うので、気持ちを共有しながら、互いに高めあうことができると思います｡これから焦りも出てくると思いますが､自分のペースを大切にして、一つ一つ積み重ねてください。皆さんが良い結果を得られるよう、応援しています。

合格体験記（東京都・特別支援学校）

スポーツ科学部　スポーツ科学科４年　M.K

① 受験対策・勉強法について

1次試験について、本格的に受験勉強を始めたのは、試験の3か月前です。試験内容は、筆記試験（教職教養・専門教科）と小論文です。試験日まで時間が限られていたため、重要なポイントを中心に学習を進めました。勉強法としては、まず過去３年ほどの問題を解き、出題傾向を把握しました。過去問題はウェブサイトに掲載されていたものを活用しました。その後、「全国まるごと過去問題集」を使用し、知識を積み重ねていきました。小論文は、自分の理想の教師像や大学での学び、教育実習などの体験談を埋め込み文字数を稼ぎました。

2次試験の内容は、個人面接と実技試験でした。面接は面接官3人によって行われ、事前に作成した面接票を当日提出しました。質問内容は、東京都を志望した理由や教育実習を通して学んだこと、今後の抱負などで面接票を丁寧に作り込んでおくことで、自分の考えを整理して答えることができました。それ以外の質問は、生徒から個人的に連絡先の交換を求められた場合、どのように対応するかといった、教員としての危機管理意識やモラルを確認するための質問もありました。面接官の反応から、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーに相談するといった協働的な姿勢が求められているように思いました。実技試験では、事前に種目と内容が発表されていたため、計画的に練習を進めることができました。本学で行われた対策講座や、専門種目の先生方から直接指導をいただき、試験での注意点やポイントを学ぶことができたため、当日自信をもって臨むことができました。

② 伝えたいこと

受験する自治体を選ぶことはとても重要だと感じました。私は勉強が得意な方ではありませんが、教師になりたいという強い思いがありました。そのため、倍率が比較的低く、一般教養の試験がない点にも魅力を感じた東京都を受験することに決めました。自分の得意・不得意を踏まえ、戦略的に受験先を選ぶことが、合格を目指すうえで大切だと思いました。

卒業生からのたより

～教員を目指すみなさんへ～

社会福祉学部　社会福祉学科　２０２３年度卒業

愛知県高等学校教諭　Y.K

１．はじめに

みなさんこんにちは。私は現在、愛知県の高等学校で教諭として働いています。大学卒業後、１年間常勤講師として働き、教員採用試験に繰り上がり合格をして本年度から教諭として働いています。まだ、１年と少ししか働いていない身ではありますが、みなさんに少しでも教員として働くことの意義なんかをお伝えできればと思います。

２．なんとかなる

まずは教員として働く中で最初に感じたことをお伝えします。それは「なんとかなる」ということです。大学卒業後、教員としての業務が始まる中で不安なことはいくつもあると思います。教育実習との違いや授業づくり、生徒との関係づくりや評価の仕方、それ以外にも業務がたくさんあり、それに伴って不安も増えると思います。しかし、だいたいなんとかなります。周りの先生も助けてくれますし、最初は苦しいかもしれませんが、１か月も経てばルーティーン化され慣れます。仕事が回らなくてしんどいなんてことがあればすぐに周りを頼ってください。潰れてしまうのは周りを頼れない人からです。しっかりと周りを頼れば普段の業務もこなすことができ、なんとかなります。

３．なんとかならない

次に教員として覚えておいてほしいのは「なんとかなる」と甘く考えていると「なんとかならない」ということです。矛盾しているように感じるかもしれませんが、これは教員としての考え方によって「なんとかなる」か「なんとかならない」かが変わってきます。どういうことかと言うと、仕事に対しての向き合い方によって求められるものが違うのでそれなりに努力が必要ということです。前述した通り、普段の業務をただこなすだけなら案外なんとかなります。しかし、生徒に対して真剣に向き合えば向き合うほど、教員は時間と労力を割く必要が出てきます。教員の給料は残業代も出ず固定給のため、どんな働き方でも給料は変わりません。そのことに対して考え方は人それぞれなので、同じ給料ならサボった方が良いという考え方を私は否定しません。しかし、私は自分自身の授業によって生徒の歩む未来が変わる、そう考えた時に努力しなければ「なんとかならない」と感じました。

４．最後に

最後に、１年目の時に先輩に言われた言葉を紹介します。それは「教科指導もできない、生徒指導もできない、分掌の仕事もできない、そんな教員に給料をもらう資格はない。」です。一見するととても厳しい言葉ですが、この言葉は現在私が教員として働く上での心構えになっています。この言葉を先輩が言った真意は分かりませんが、私は教員という仕事をして給料を貰っているのなら給料分の仕事をするべきだと解釈しています。教員として働く中で生徒に怒るのが苦手な私ですが、その言葉を受けてからは仕事として生徒に怒らないといけないと思うようになりました。また、その他の業務についても仕事だからやる、そう考えると少し仕事に対する考え方が変わり、真剣に取り組むようになったと感じています。

ここまで、２年目にも関わらず偉そうなことばかり述べさせてもらいましたが、今回私が伝えたことは数いる教員の中の一人の考え方に過ぎません。教員としての働き方に正解はありません。いざ働く中で、自分なりの教員像を見つけることが最も重要なことだと思います。教員に向いていない人なんて本質的にはいないと思います。自分自身がどういう教員でありたいか、それを忘れないようにしてください。

卒業生からのたより

スポーツ科学部　スポーツ科学科　２０２４年度卒業
東京都中学校教諭　Y.K

1. はじめに

私は、令和６年度東京都公立学校教員採用候補者選考の保健体育科で合格し、現在は東京都の中学校で特別支援教室の担当として勤務しています。私の教員生活は、「そもそも特別支援教室ってなんだ？」というところから始まりました。特別支援教室とは、知的障害がなく、自閉症、ADHD、学習障害、情緒障害のある生徒が特別な支援を受けられる場のことです。これから教員を目指す皆さんへ、教員になった私から、少しでも参考になる話を届けられたらと思います。教員２年目を迎える今、１年を通して感じたことや今の皆さんに大切にしてほしいことをお伝えしたいと思います！

2.教員としての自覚を持った１年間

４月１日、沢山の会議が予定表に書かれており、何がどんな会議で、他の先生方が何を話しているかも分からず、ただ座って聞いているだけ、そして、私が所属している特別支援教室では、よく分からない書類の作成を初日から頼まれるというのが、私の初出勤の日の出来事です。生徒が初めて登校してきた日、やっと教員になった自覚が湧き、「これから自分がここにいる生徒が成長していく過程に関わっていくのか」と思うと同時に、もっと教員としての『自覚』と『責任感』を強くもたなければならないと感じました。なぜなら、生徒にとって教員は１年目でもベテランでも同じ学校の先生だからです。そこで私は、教員らしい言動をとることを第一に意識しました。教員は生徒にとって大きな影響を与える存在だからこそ、１人の社会人として、人生の先輩として適切な言動をとることが大切だと感じました。教育実習の指導教員に『一生学び続けることが大切』と教わりました。当時からその言葉が印象に残っていましたが、今はその重要性を実際に痛感しています。今後どれだけ年数を重ねても、生徒により良い学びを提供するために、努力は惜しまないつもりです。特別支援教室では、発達障害のある生徒に自立活動の授業を個別で行うため、皆さんが想像するような集団で行う授業とは少し違うかもしれません。より生徒との信頼関係が重要になってくるため、日頃からコミュニケーションを取ったり、生徒の好きなことを把握したりすることを大切にしてきました。初めはどんな授業をしたらいいのか迷いながらでしたが、課題を改善・克服するために、生徒と向き合い、今の実態を常に把握しながら授業をすることが大切だと１年間を通して学びました。

3. 教員を目指す皆さんへ✨

教員という仕事は、本当にやりがいのある職業だと思います。生徒と関わっている時間が仕事をしている時間の中で１番楽しくて、教員になって良かったと思わせてくれます。皆さんは今、「将来教員になりたい！」という思いを胸に一生懸命勉強をしていると思います。皆さんは、「なぜ教員になりたいと思いましたか？」「どんな教員になりたいですか？」これを聞かれた時にすぐに答えられますか？まだ答えられないという人や上手く言葉がまとまらない人もきっといますよね。でも大丈夫です！一緒に教員を目指す仲間が近くに沢山いるはずです。ぜひその仲間と教員になりたいという思いを語り合ってください！本気で教員を目指すのであれば、強い気持ちをもってください。皆さんだけではなく、先輩方も今の皆さんと同じ道を通って教員になる夢を叶えています。ぜひ、教員という道を諦めずに、少しでも多くの人が夢を叶えられることを心から願っています！

教育実習体験報告 ～大学の学びと教育実習～

教育・心理学部　子ども発達学科　学校教育専修３年 Y.K

私は、小学校の教員を目指し、教育学部へ入学し、３年生の秋に念願の教育実習へ出向くことができました。私は県外からの入学ですので、地元の母校にて教育実習をすることができました。母校での教育実習は、当時の小学生だったことの思い出も然り、教育者としての視点に立ち、新鮮な気持ちで実習に取り組むことができました。母校実習、愛知県内の小学校での教育実習はどちらも、学ぶことや思い、経験できることが違うとは思いますが、貴重な経験であることは間違いないと、教育実習報告会を通じて感じました。

教育実習では、学びとして大きく 2 つあると考えます。それは、「大学での学びの実践」と「大学では学びきれない現場のリアル」であると思います。実習として赴いているわけですから、大学の学びの一環といっても過言ではありません。しかし、１～３年前期まで大学で学習してきた「教育法や指導法、社会科学」など、実習をする上で必要な知識・技能と、現場で体験する「応用や即興、実践する力」というのは教育実習ならではの、大学と現場の差であると感じました。

まず、教育実習で感じることができた「大学での学び」です。日福の特徴として「教科書“を“教えるのではなく、教科書”で“教える」といった、教材研究に重きをおいた指導法であると言えます。実際、他大学の実習生と比べ、大きく違いを感じることもありました。私の実習担当教員やクラスには幸い、その方向性が受け入れられ、比較的、担当単元でやりたい授業を行うことができました。感じた事としては、前述の「教科書で教える」授業を目指したことと合わせて、「自分のこうしたい。や、こんな授業を作りたい」といった姿勢を評価されていたと思います。この姿勢は実際教員として現場に立つ際に支えになるものだと考えます。このような姿勢や視点を常に持っておくことで、自然と前述した、自分で教材や指導法の研究を行って授業をつくるための専門的技量が向上していくと思いました。ただ、管理職の教員からは「子どもたちがそれをどう捉えるかといった視点を大切に」といった評価をいただきました。自分の姿勢と子どもたちの実態をバランスよく捉え、実践することが大切だと感じました。

次に、「現場のリアル」から感じた事です。私の実習は１０月の中頃に行い、この時期は教員にとっても児童にとってもたくさんのイベントが盛りだくさんの時期でした。私が経験した行事として、教員の教科研究大会や就学時健康診断、低学年の地域学習などが挙げられます。３週間だけでも現場にいないと知らなかった行事や授業外の仕事ということを経験することができました。これらは大学で学ぶ機会は少なく、実習や現場に教員として立った時に初めて経験することであります。中には本当に教員の仕事なのか？と疑問に思うことや、本当は行政や他職種が連携しないとできない仕事が、何となく、やずっとそうやってきているからという理由でそのまま教員の仕事として続いていることがいくつもありました。これらが近年騒がれている教員の多忙化やブラックと言われる一因であるのではないかと感じました。声をあげられる第一線は紛れもなく現場の教員であり、何となく流されるのではなく、問題意識を持ち、行動していくことで良い方向へ環境を変えていくことができると思いました。また、私が小学校の時と大きく違った点として ICT の活用があります。大学でも多少活用法は学びますが、実際に現場でどのように活用されているのかは教育実習にて肌で感じることができました。私の実習先では、低学年で記入式（タッチパネルで指で文字を書く）による文字入力。中学年でフリック入力、高学年でキーボード入力をしながら学校として ICT を活用し、学年に合わせた授業を行なっていました。

大学での学びはその時期の指導法を学ぶことができますが、学習指導要領がおよそ１０年に一度更新されるように、現場は常に流動的です。自分たちが小中学生だった時と今の現場にも違いがあり、現場に教員として立った時にも必ず違いはあるはずです。常に時代と共にアップデートし、批判的に捉える姿勢を持ちながら、何より「子どもたちにとって」を考えて教育を創っていく必要があると感じました。

私にとって教育実習は教員を志す上でかけがえのない経験となりました。全ての経験に目的と前向きな姿勢を持つことで、何が必要であるのかが見えてくるものだと実感しました。経験するものが必ず何かに直結することを実感し、残りの大学生活をより有意義にしていきたいと思います。

教育実習体験報告（特別支援学校）

スポーツ科学部　スポーツ科学科４年　T.K

私はこの度、特別支援学校の高等部にて 2 週間の教育実習を行いました。実習に行くまでは、大学で学んだ知識をいかに実践するかというアウトプットの場だと捉えていましたが、実際に生徒たちと過ごした日々は、私の想像を遥かに超え学びに満ちた、自分自身を更新し続ける時間となりました。

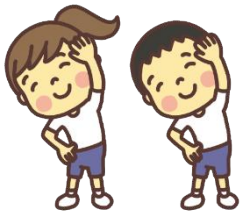
実習の最大の学びとなったのは、国語の研究授業です。私は「生徒が主役となる授業」を目指し、指導案を練り上げ当日を迎えました。しかし、授業開始直前に予期せぬ事態が発生します。休み時間のトラブルにより、一部の生徒がパニック状態で着席できなかったのです。私は懸命に言葉かけを試みましたが状況は好転せず、最終的には担任教諭の助力を仰ぐことになりました。

この経験から痛感したのは、特別支援教育における「指導案」はあくまで一つの指針に過ぎないということです。生徒の状態は日々刻々と変化します。綿密な準備を前提としつつも、目の前の生徒の表情や心の揺れを敏感に察知し、その場の状況に合わせて柔軟に指導を再構成する「臨機応変な対応力」こそが、教員に求められる核心的な能力であると学びました。計画通りに進めることに固執するあまり、生徒の心に寄り添い切れていなかった未熟さを知ったことは、私にとって何よりの教訓となりました。

授業内容においても、大きな気づきがありました。「聞く」活動で生徒が正解にたどり着けずストレスを感じている際、私は理解を助けるために動画を繰り返し流しましたが、それがかえって生徒の集中力を削いでしまう結果となりました。また「読む」活動でも、私の範読を生徒が復唱する形が単なる模倣に留まってしまい、文章を自ら捉えるという本来の目的を達成しきれませんでした。これらの反省は、生徒の特性や集中力の持続時間を、私が自分の視点だけで予測していたことに起因していました。生徒の立場に立って「どう見えるか」「どう感じるか」を徹底的に突き詰める教材研究の重要性を、失敗を通じて深く理解することができました。

一方で、大きな喜びを感じた場面もありました。体育の授業で、生徒たちの頑張りに対してハイタッチを取り入れた時のことです。肯定的なフィードバックにより、生徒たちがパッと表情を輝かせ、それまで以上に意欲的に活動に取り組んでくれるようになりました。小さな成功体験を積み重ね、それを共に喜ぶ姿勢がいかに生徒の自己肯定感を高めるか、言葉を超えた心の通い合いが生まれる瞬間に立ち会えたことは、私が教員を志す上での揺るぎない原動力となりました。

さらに、作業学習で見せた生徒たちの真剣な眼差しや、自立した報告の姿からは、教育が彼らの将来の生活に直結しているという重みを学びました。特別支援学校の教員は、生徒の「今」を支えるだけでなく、その先の長い人生への架け橋となる責任ある存在です。学校全体がチームとなり、一人の生徒を多角的に支える体制を目の当たりにし、教職という仕事のやりがいを再確認することができました。



教職インターンシップⅠで学んだこと

教育・心理学部　学校教育学科２年　M.H

私は今回のインターンシップに参加し、とても貴重な体験をさせて頂きました。様々な学年の授業に参加した中で特に印象に残っているものは運動会と音楽の授業です。音楽の授業では子ども達と「もみじ」を一緒に歌わせて頂き、子ども達が体を動かしながら歌を歌い、音楽を心から楽しんでいる様子が感じられました。また、運動会では子ども達の活躍を間近で見ることができ半日だけでは足りないと思うほど、充実した時間を過ごさせて頂きました。

さらに担当させて頂いたクラスの先生方や子ども達が温かく迎えてくださり、子どもと関わる際には同じ目線に立って話しかけるということの大切さや、教師も子ども達と一緒に楽しむ姿勢の大切さを改めて感じました。

今回のインターンシップを通して、教育実習では子ども達が安心や楽しさを感じられる授業作りを心掛けていきたいと考えました。また、自信が持てず不安を感じることもありますが、その分、事前の準備や練習を重ね子ども達一人ひとりに寄り添えるように努力していきたいです。

教育・心理学部　学校教育学科２年　S.M

子どもとの関わり方やコミュニケーションの取り方について、教職インターンシップⅠで実際の場を通して学ぶことができた。大学の講義や書籍だけでは分かりにくい、「どこまで生徒に踏み込んで関わってよいのか」という距離感を体感し、理解できた。特に中学生という心身ともに不安定で難しい時期においては、生徒が安心して話せる環境を整えることが重要であると感じた。教師は堅苦しい関わり方ではなく、楽しく温かい雰囲気をつくることで、生徒にとって話しかけやすい存在になり、自然なコミュニケーションにつながると学ぶことができた。このことを通して、教育実習でも活用していきたいと感じた。

教育・心理学部　学校教育学科２年　M.Y

今回の発表を通して、通常学級に在籍する「気になる子」への関わり方について深く考えることができました。

インターンシップに参加した際、気になる行動をしている子どもに声を掛けたところ、担任の先生から「そのままでいい」と言われた経験がありました。そのとき、本当に他にできる支援はないのかという疑問を抱いたことが、本テーマに取り組むきっかけです。調べ学習を進める中で、子どもを叱るのではなく、具体的で分かりやすい指示やポジティブな声掛けを行うことが、子どもの安心感につながり、学習や生活への意欲を高めることが分かりました。また、一度に多くの指示を出すのではなく、「今から何をするのか」を明確に伝えることの大切さも学びました。来年の教育実習では、子どもの行動だけを見るのではなく、その背景や気持ちにも目を向け、一人ひとりを理解しようとする姿勢を大切にしたいと考えています。うまくいかない場面もあると思いますが、子どもに寄り添った声掛けを意識し、安心して過ごせる学級づくりに貢献できるよう努めていきたいです。

学校福祉の視点から「教職の教養」を深めてほしい

研修・連携部門長　鈴木庸裕

学校福祉とは、教育学・社会福祉学・心理学の実践研究の交差点から教育実践を再定義することを目的としています。学校現場では、不登校、いじめ、貧困、虐待、発達特性、ヤングケアラー、外国ルーツの子どもなど、教育職単独では対応が困難な課題が顕在化しています。これに対し、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラー、医療的ケアの看護職などの配置が進められいますが、こうした専門職間の役割分担や連携の困難さは依然として残されています。学校で一緒に仕事をする専門職の横断的な機能を志向する学校福祉では、子どものウェルビーイングに対して制度的・専門的に責任を負う機能を大切にする多職種の専門性に共通する「教養」が求められます。

専門性とは、分かっている人だけが分かる言葉として完結するものではありません。むしろ、異なる背景をもつ専門職らと意味を共有し、価値を共に創り出す言語的な能力を持つことです。哲学者ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインは、「私の言語の限界が、私の世界の限界を意味する」と述べました。これはプロフェッショナリズムの本質を突いています。

この言語的な能力とは、子どもの生活世界での出来事をどう解釈しどのように判断し、次にどんな行動を選択するのかという思考と実践の基盤となる教養につながります。専門性が自分たちだけに通じる「閉じられた言語」にとどまると、その専門職は孤立します。真の専門性には、自らの領域を深める言語と同時に、異なる専門や非専門家と価値を共創するための架け橋となる言語が不可欠になります。

これらを共通言語という観点からみると、次の三層の構造があります。

1 つ目は、高度な知識や特別な技術（形式知）にあたる層です。これは教科書や学術論文、マニュアル、法律、ガイドラインなど、明文化された知識とスキルを指します。専門家同士が迅速かつ正確に意思疎通するための標準化された言語であり、業務の質や効率を支えるものです。

2 つ目は、実用的技術・実践（暗黙知）です。現場経験を通じて身体化されたコツや判断の勘所にあたるものです。マニュアル通りではない状況下で発揮される実践知や経験知、あるいは文脈を読み取る能力です。この暗黙知を言葉にし、いかに共有できるかどうかが組織的な専門性を左右します。

3 つ目に、倫理や価値があります。専門性を何のために使うのかという志や倫理観です。この層が専門職を専門職たらしめます。これを欠けた専門性は、社会において有害になります。

教職をめざすみなさんにとって、いかなる層からであっても共通言語を発見する機会はどこにあるでしょうか。研修や連携の目的として。